

9月7日午前8時、帯広畜産大学を出発し、現地時間の午後9時半頃、フィリピンのマニラに無事到着しました。

今日を迎えるまでに私たちは国際協力ディベート論の講義や、7月の事前勉強会を通して、準備を着々と進めてきました。講義の時間においては、海外実習に参加する6名はフィリピンを調査対象地として、各自でテーマを決め、合計3回の発表をしました。学生や教員の客観的な質問や意見を取り入れながら、発表内容の向上に努め、実習最終日(16日)のプレゼンテーションに備えます。

7月の事前勉強会では、毎週水曜日の昼休みに集まり、フィリピンに関する情報を共有し見識を深めました。フィリピンに関して、私たちが知っておくべきと判断し、取り上げた分野は、「環境・自然」、「経済」、「歴史」、「食文化」、「教育」、「農業」の6つでした。この6つの分野を分担して、内容をまとめ、調べた内容を共有しました。この事前学習によって、フィリピンの基本的な情報を知ることができました。インターネット上の画像で見た風景や建物、食べ物などを現地で実際に自分の目で見ることは、とても楽しみなことであり、より強く私たちの印象に残ることと思います。

出発する4日前の9月3日(火)、実習最終日のプレゼンテーションをどのような流れで進めていくかと、発表内容および現地でのどのような調査をするかの最終確認をしました。直前ではあったものの、より良いプレゼンテーションができるよう、プレゼンテーション内容を変更する学生もありました。発表者と調査内容は以下の通りです。

- ①吉田萌葵…フェアトレードバナナの購買意欲
- ②大井和佐…きのこの健康改善効果と需要拡大の可能性
- ③坂井春穂…フィリピンにおける青果運搬の課題
- ④青木みのり…フィリピンと日本の水質汚染
- ⑤鈴木友莉子…廃用プラスチックに関わる問題の解決策
- ⑥松本翔…フィリピンにおける英語教育の意識調査



成田空港にて遅めの昼食

マニラのニノイ・アキノ国際空港に午後9時半頃に到着した後、ATI Hostel Quezon City まで、現地の



マニラ空港到着時の様子

のドーンさんという方(ドライバー)に車を運転していただき、宿へ向かいました。宿に向かう車中で感じたことが2つあります。

1つ目は交通についてです。フィリピンの首都というだけあり、午後10時頃でも、ひどく渋滞していました。また、日本では考えられないような突然の車線変更や割り込みなども見られました。これらにはウィンカーの点灯による意思表示を伴わないことが多く、いつ事故が起こるか気が気でない

かったです。ドーンさんによると実際に交通事故が発生してしまうこともあるようです。フィリピンで車を運転するには日本と比べ、相当の技術がいると感じました。また、渋滞している車の間をバイクが素早く簡単に擦り抜けていく様子に驚きました。フィリピンではこのような光景が「普通」であるようです。ただ、帯広に比べると、クラクションの音を聞く回数が非常に多いように感じました。街中に入ると道路が2~3本から6本に増えたものの、進度はあまり変わらず、フィリピンの交通渋滞の深刻さを感じました。今日は土曜日で休日でしたが、平日の朝は通勤等のため休日の比でないほどに渋滞がひどくなります。この交通渋滞を解決するため、JICAが交通渋滞解消プログラム計画していたり、鉄道の普及を進めていますが、なかなかうまく進んでいないようです。経済発展が急速に進む国のインフラの整備の難しさを感じました。

2つ目はフィリピンでの街頭広告に用いられる言語についてです。日本での街頭広告は当たり前のように日本語が使用されます。しかし、フィリピンの街頭広告の多くが英語表記でした。フィリピンのマニラではタガログ語が現地語として広く用いられています。しかし英語も公用語として用いられています。ドーンさんによると義務教育を受けた人のほとんどが、その英語教育の成果により英語を理解することができるそうです。1つの国で2か国語が当たり前のように使われていることに驚きました。

フィリピンでの10日間の研修で私が大事にしたいことが3つあります。1つ目は街の様子をよく観察するということです。今回の海外実習では移動時間が多くあります。車の中から外を見渡して、人々の様子や交通の特徴などを少しでも感じとれるようにしたいです。2つ目は疑問に思ったことは書き留めるということです。この研修で様々なところを訪れ、たくさんの方からお話を聞く予定です。その中で一度の説明で聞き取れなかったことや、どのような意味だったのだろうと疑問に感じることもあると思います。そんな時、その疑問や感じたことをそのままにするのではなく、書き留めておくことで日本に帰国してから調べ学習をするきっかけにしたり、今後のために活用できるようにしていきたいです。3つ目は感じたこと、考えたことを仲間と共有することです。例えば同じ展示や作品を見ても感じ方や味方は人それぞれです。今回一緒にフィリピンを研修でまわる仲間と意見交換したり、自分が思ったことを人に伝えることで自分の考えを整理し、考えを深めたいです。また、日本に帰国してからもフィリピンでの海外実習での経験を友達に伝えることで、また新たな気づきを得られると思います。きちんとフィリピンでの経験を周りの多くの人に伝えていけるような有意義な実習になるようにがんばります。

2日目に最初に訪れたのは、城塞町であるイントラムロスです。イントラムロスは16世紀にスペイン人がフィリピン統治の拠点とした街です。周囲には城壁が形成され、かつてはスペイン人とメスチーソ（スペイン人との混血）のみが住むのを許されていました。第2次世界大戦中は、日本軍とアメリカ軍の戦闘によってほとんどが破壊されてしまいましたが、現在でも石畳や建物の一部を見ることができます。そんなイントラムロスの街の中の「サンチャゴ要塞」と「教会」の2つについてレポートします。

1つ目は「サンチャゴ要塞」についてです。この場所はイントラムロスの北西の一番端に位置しており、パッシング川に面しています。川に面しているということもあり、城壁都市の中で戦略上重要な位置を占めていました。実際に要塞の一番上まで登ってみるとパッシング川を一望することができました。今日は日差しが出ており暑かったのですが、要塞の上は川からの風が吹いており涼しく感じました。今は観光や散歩に適したとても穏やかな場所ですが、ここは第2次世界大戦中に多くの人が命を落とした場所でもあります。私たちはただ観光地として訪れるだけではなく、その歴史について学んでいくことも重要なことだと感じました。



サンチャゴ要塞

サンチャゴ要塞の中には、「リサール博物館」があります。この博物館は「ホセ・リサール」という人物について詳細にまともられていました。この人物について簡単に紹介します。リサールは19世紀後半のスペイン植民地支配下のフィリピンを、スペインに留学した経験をもとに批判しました。支配者であるスペイン政府の不正や腐敗、そしてフィリピン人に自己改革の余地があるということを主張したかったのです。この主張をリサールは得意な詩や小説によって表しました。代表的な作品が1887年の『ノリ・メ・タンヘレー われに触るな』です。この作品は続編も出され、小説の主人公を通じてリサールはスペインからの独立をすることがフィリピン人の国民性を守ることにつながると繰り返し主張しましたが、1892年スペイン当局に逮捕され、その4年後の1896年12月30日35歳という若さで処刑されました。実はこのリサール博物館はリサールが処刑前まで暮らしていた場所です。

また、目的地であるサンチャゴ要塞までの道中も興味深いものがたくさんありました。というのも、今日は日曜日でキリスト教信者の多いフィリピンでは、家族でそろって教会に礼拝に行く日だからです。道中にも多くの教会を見かけましたが、一番目に留まったのは宿泊所からさほど遠くない場所に位置にする Quiapo Church です。その教会は壁一面が白く塗られ、歩道に面した壁側には鮮やかに彩られたイエス像や聖マリア像などが並んでいました。歩道側の解放された扉から



Quiapo church の様子

は、ひっきりなしに老若男女が出入りする様子が確認できました。教会の中は、たくさんの人で埋め尽くされ、身動きがとれないのではないかと勝手に心配になるほどの混雑具合でした。わたしたちはこの教会を目的地にはしていなかったため、車から降りて見学はしていませんが、ここまで観察できたのは、この教会の前の通りが非常に多くの車とバイク、歩行者が行きかって混雑し、交通渋滞を起こしていたからでした。

出発してからの 10 時過ぎと、帰り道の 15 時ごろの二度にわたって教会の前を通ったのですが、いずれの時間帯も非常に混雑していました。また、周辺は多くの飲食店やアパレルショップが立ち並び、そのにぎわった様子をみた得字先生が「門前町のような」とおっしゃっていて、その通りだと思いました。まさしく門前町のように、教会によってその地域が活性化されていることが車の中からでもよくわかりました。礼拝を終えた人々は家族で過ごす時間を大切に、楽しんでいるように見え、そこにフィリピン人の家族を非常に大切にするという慣習が感じられました。

この後はスーパーマーケットに行き、翌朝の食事の買い出しを済ませ、晩御飯を運転手の方も一緒済ませ、今日の行程が終了しました。日曜日にもかかわらず私たちのスケジュールに合わせてくださった運転手の方にあらためて感謝し、明日からも頑張ります。